

「あたりまえ」を支える税金

十文字中学校 高田 陽菜乃（たかだ ひなの）

私は税について、あまり関心を持っていなかった。税は大人が払うものであり、子どもの私には関係のないもの。ものを買う時に追加されて払わなければいけないお金、ぐらいにしか思っていなかった。

渡しには高校三年生の姉がいる。姉は大学受験に向かって勉強に励んでいる。親とも進学する大学について話し合っている。

姉が高校生になり、大学について家族で話すことが増え、気づいたのが、大学に入学すると、たくさんのお金がかかることだ。大学によってかかるお金は違うが、どの大学も何百万とかかる。私は、大学で学ぶためにこんなにお金がかかるとは思っていなかった。

このことをきっかけに、私は税金について考えるようになった。そして税を支える「あたりまえ」のありがたさを実感したことが二つある。

一つ目は、九年間の十分な教育がうけられることだ。日本では、義務教育があり、小・中学校で九年間学ぶことができる。姉は高校生になってから、教科書を自分で買わなければいけなくなった。大学生になれば、これまでよりもっとお金がかかると思う。でも、小・中学生のうちは、教科書が無料で配布され、親の負担がなく、多くのことを学ぶことができる。

今まで、自分の使っている教科書が、どうやって自分のもとにきたのか考えたことはなかった。教科書は、親や勉強を教えてくれる先生、地域の人など、たくさんの方が働いて払った税金からできている。そう思うとみんなに「ありがとう」と伝えたいと思う。

二つ目は、公共事業費やゴミ処理費、社会保険などに税金が使われていて、私たちの生活の多くが税に支えられていることだ。税がなければ、「いつもの登下校などで歩いたり、自転車で走ったりしている道路は、ボロボロになって通れないかもしれない。税がなければゴミが収集されず、道がゴミでいっぱいになっているかもしれない。税がなければ、私が病気にかかった時、治すためにたくさんのお金がかかってしまうかもしれない。税があるのとないのでは、こんなに生活が変わってしまう。みんなが払った税によって生活が支えられている。とてもありがたいことだと思う。

このように、考えてみれば、私たちの生活のあたりまえの多くが税によって支えられている。学校に通うというあたりまえ。ゴミを出せば回収されるというあたりまえ。道路を歩く、自転車で走る、車が走るといったあたりまえ。他にもたくさんのお金があり、税とその税を納めている多くの人が互いに支え合って社会を支えている。私も、互いに支え合って作りあげる社会の一員になれるような大人になりたい。